

Buddhist Music — Newsletter

佛 教 音 楽

ニュースレター

特集：伝統の音声



浄土真宗本願寺派 教学伝道研究センター
本願寺仏教音楽・儀礼研究所

<http://www2.hongwanji.or.jp/ongaku/>

仏教音楽展望

特別寄稿：伝統の音声

私たちが今最も大切なテーマの一つとして掲げるのは、伝道や布教の現場での仏教音楽の活用です。そこでまず、宗派の歴史から学ぶため、節談説教を取りあげます。

音声の荘厳

佛教大学名誉教授 関山 和夫

節談説教

平成19年7月3日(火)に、東京・築地本願寺で「節談説教布教大会」が開かれ、6名の正統節談説教伝承者の方々が出講される。45年前に、当時、滅亡寸前だった節談説教を世に紹介した私にとって実に感慨深いことである。

私は、昔、節談と呼ばれる真宗独自のお説教を何度も何度も聴いた。マイクなど全然使わない時代だったのに、説教者の声は外までよく聞こえた。高座の説教者は、ことばに抑揚をつけ、見事な美声と絶妙の節回しをもって、歌うがごとく語るがごとく、滔々と弁じたてて、まるで善男善女を吸いこむようであった。祭文・平曲・浄瑠璃・落語・講談など日本の「語る芸」「話す芸」のあらゆる要素を包含し、涙と笑いをないまぜにした節談説教独特の鮮やかな弁舌が、満堂の群参(説教用語で大勢の参詣人のこと)を陶醉させ、要所要所で“受け念仏”があり、一席終わると鯨波のようなお念仏が堂内をどよもしたものである。今、あの最高の宗教的雰囲気をかもしだした光景は、いったい何処へ行ってしまったのであろうか。

自分では言いづらいが、もう忘れられてしまったので、あえて言わせていただく。私は学生時代から日本の話芸が説教(唱導)から来ていることに気づいていた。それを学問的に研究して紹介することができたのは拙著『説教と話芸』(昭和39年2月、青蛙房)であった。ちなみに「話芸」は私の



造語で、『広辞苑』第三版から採用された。もし、私がこの本を書かなかっただら、旧型の布教使たちは、ただの古びた型の説教者という評価で終わってしまったはずである。

傑出した布教法

節談説教の文句は美しい。日本語の特質を生かし、七五調を基盤にしたリズムカルな表出。宗義を踏まえ、和讃や法語を巧みに導入し、洗練された発音、発声による優れた節回しで聴衆の心の中に入りこんでいく。その表現は文学としてまさり、技術の上では芸術性も具備する。その名文句は、長い歴史の中で幾多の説教者が幾度も実演してつくりあげたものだ。自然にハナシがフシになり、フシがハナシになる話し方技術は絶妙であり、傑出した布教法である。そのことについて私は、拙著『説教の歴史的研究』(法藏館)や同『説教の歴史』(岩波書店・白水社)、同『庶民芸能と仏教』(大蔵出版)の中で詳しく論述してきた。私が強調したいことは次のごとくである。

話芸の成立過程に説教が含まれていることは確かであるが、説教は芸能ではない。節談説教は布教の一手段であり、断じて芸能として生じたものではない。あくまでも布教である。法芸一如だ。布教活動なるが故に、骨を砕いても技術を習得し、仏教学・宗学を学びとらねばならない。

宗祖親鸞聖人が開かれた浄土真宗の法灯を掲げて、命が

宗祖親鸞聖人が開かれた浄土真宗の法灯を掲げて、命が



目次

* 仏教音楽展望	— 音声の荘厳：関山和夫	p.2
	いのちの尊さを音楽とともに語りかける：西脇顕真	p.4
	音楽布教へのいざない：前田正樹	
* 交流のひろば	— 第13回世界仏教婦人会大会報告：前田正樹	p.5
	コーラスふじの花：丸山千晶	
* クローズアップ	— 響流する歌声を — 仏教讃歌の大合唱をめざして：福本康之	p.6

けで大眾を開導したあまたの説教者たち。宗祖の教えを血のにじむ努力によって長い歴史と伝統の中で修練に修練を重ねて会得した口演技術をもって語り続けた幾多の説教者たちの、地べたを這うような布教活動の精神を忘れてはならない。多くの説教者たちは、貧しさに耐えて人生の苦海に沈む人びとを救った。彼らが深い信心とともに全身を震わせて説いた説教を聴聞しながら、どれほど多くの人たちが往生の素懐をとげたことが。

音声の荘厳

ことばに節(抑揚)をつけることは、説教の必須条件として『十二部教』『三輪説法』『四弁八音』の名称でインドから伝わり、中国からも梁の慧皎撰『高僧伝』の「声・弁・才・博」など高度な弁法が日本に伝来した。わが国では、文献上では聖徳太子の高座説教が古く、上代の説教は『日本霊異記』などでわかり、中古には「法華八講」が盛行して説経師(説教師)が活躍した。平安末から鎌倉にかけてのころに出現した澄憲や聖覚は「安居院流」の説教を法然聖人の専修念仏の教えに合わせて盛んに行なった。「三井寺派」も生じた。

親鸞聖人の『三帖和讃』は、化導の上で絶大な力を示した。ことばに節(メロディー)をつけて唱える方法は、物を記憶し、覚えるために最良の効果を発揮する。和讃の四句一首の形式の創造は、実に親鸞聖人の苦心の結晶であった。後世、七五調の韻律を活用した真宗独自の節談説教は、親鸞聖人の和讃の影響が極めて大きかったのである。

本願寺三世覚如上人の『本願寺聖人親鸞伝絵』(『御伝鈔』『御絵伝』『報恩講式』)や存覚上人の『歎徳文』の名文は、長く節談説教で愛誦され、広く親しまれた。

さらに蓮如上人は、節談の実演にあたって、繰返し御開山聖人の和讃を引用し、常に感動的な話し方をするように配慮した。説教の中に和歌を引いて朗詠することも勧めた。静かな中にも情念を重視した“音声の荘厳”を示したのである。このことは、布教の未来を考える場合、極めて重要であると思う。

伝統と創造

近世の本願寺は、東西に分立したが、西に仲街学林、東に高倉学寮が創立され、多数の学僧が輩出した。説教者はむ

ろん教学を背景として活動したが、享保・宝暦・明和のころ本願寺派に菅原智洞、安永・天明・寛政のころ大谷派に粟津義圭があらわれて、真宗説教興隆の基盤を築いた。

播州・東保の福専寺(本願寺派)は、説教の専門道場で、世に東保流説教といわれた。これを開いたのは恵門(1791—1862)であり、彼は若くして上洛し、本願寺の学林に学び、仏教学・真宗学を修め、布教に力を注いで優れた型を完成した。帰国後、福泉寺の中に説教道場・獲麟寮を設立し、全国各地から入門して来た多数の子弟を育成した。寮内に研究・説教の二科を設け、説教技術(「節談」という呼称を普及させた)を授けた。

真宗の説教は、近代に入っても本願寺派に大野義深、木村徹量、大谷派に宮部円成、服部三智磨らの巨匠が出て節談説教は昭和初期まで盛行した。旧来の能登節・越後節・尾張節・筑前節などのほかに東保流・速藤流・椿原流・渥美流・調流など多様な型が相承されたが、昭和20年代に入って僅少の伝承者を残して、随行制度も説教道場も説教所も一気に無くなってしまった。

節談説教は、芸能性が強く、近代社会に合わない点が目立ち、その伝統は宗門の近代化の中で衰退していった。しかし、節談が果たした文化史的役割は再評価されねばなるまい。節付説教(のちの真宗の節談説教)は、声明とともに各時代の文化を創造した。和讃・御詠歌・歌念仏・念仏踊り・語り物・話芸などはすべて仏教における声明や説教(唱導)から派生したものだ。現代布教は、その伝統を謙虚に踏まえながら、さらに日本の新しい文化を創造する力をもたねばならない。



石川県輪島市・満覚寺(大谷派)布教大会 広陵兼純師の節談説教

* 資料庫から	— 資料が語るあの時あの場所：九條武子さまと仏教音楽 ……………	p.8
	仏教洋楽人物プロフィール：音楽兄弟 — 小松耕輔・平五郎・清	
	歌ってみませんか：赤き花赤しと見つ(詞・岡本かの子/曲・山田耕筰) ……	p.9
* 情報コーナー	— みる・きく・よむ：BOOK・CD・イベント情報 ……………	p.10
	研究所だより ……………	p.11
* 本願寺文化にふれる	— 本願寺 折々の文化：籠谷眞智子 ……………	p.12

本願寺仏教音楽・儀礼研究所の方からお話がありました。「法話楽団・迦陵頻伽の活動が、多くの人たちから関心を寄せられている。本紙“ニューズレター”で取り上げたいと思います。如何でしょうか。」この打診は大変ありがたく、「中日新聞」に掲載された記事の要約を、以下に紹介させていただきます。

あなたは大切な人です

ある病院でご法話をさせていただいたとき、話の成り行きで童謡「しゃぼん玉」を歌った。「しゃぼん玉は人のいのち、生まれてすぐにこわれて消えたというのは、作者にとって幼くしてこの世を去っていった愛娘のことだったのかもしれない……。」そんな話をしながら、いくつかの童謡や唱歌に触れた。お話の最後になって「皆で『故郷』を歌いましょう」と呼びかけることになったのも、自然の流れであった。ある人は涙を浮かべ、またある人は合掌しながら、歌ってくださった。会場の人たちが心一つに溶け合い、優しい時間の流れを感じた。

この時の体験が、私には一つの機縁となった。同級生にギター伴奏とコーラスを依頼し、歌に合わせて仏教の法話をするという活動を始めたのである。グループの名前を「法話楽団・迦陵頻伽(かりょうびんが)」とした。迦陵頻伽とは極楽浄土で妙なる美しい声で鳴いているという鳥の名前である。その音色はそのまま尊い法の調べとなっているという。厚かましい命名であるが、そうありたいとの願

いもあった。

あれから七年が過ぎた。幸いなことに、私達の活動は多くの方々から温かく迎



えられた。口コミで広がってあちらこちらから公演依頼を頂くようになった。二年前、あらたに作曲家、ピアニストを主力メンバーに迎え、活動に新展開を図った。彼女らのアドバースで、法話と歌を交互に繰り返すのではなく、公演全体を音楽で包むような新しいスタイルも誕生した。法話の最中にも語りを最大限に生かしてくれる素晴らしいBGMが奏でられ、私のつたない法話にも息吹が与えられた。演奏曲も「里の秋」「浜辺の歌」「故郷」などの童謡、唱歌を中心に、「千枚田のうた」「オペラ竹取物語の間奏曲」など、メンバーが作曲したオリジナルの楽曲にまで広がった。どの歌にもそれぞれのいのちの物語が秘められている。

すべてのいのちは如来から、かけがえのない一人子の如く慈悲の心で哀愍されているとお経には説かれている。「如来から慈しまれていないいのちは一つもない。あなたは大切な人です。」それが私たちの伝えたいメッセージである。(以下略)



世の中が渾沌としている中で、私たちの公演が仏さまのみ教えを聞き始めるきっかけになればと願っています。

●公演予定

3月14日(水) 13:00 / 大阪教区「婦人の集い」
会場：大阪府立青少年会館文化ホール
主催：本願寺派大阪教区仏教婦人会連盟

●CD出版予定(3月上旬)

「法話楽団・迦陵頻伽 in びわ湖ホール」(自照社出版)

音楽布教へのいざない

常任研究員 前田 正樹

■工夫次第で素晴らしい法話に

次ページに報告するハワイでの世界仏教婦人会大会で、基調講演をされたケネス賢信田中師が、この講演に関する日本語と英語の歌の紹介と合唱の指導をされました。これはワークショップ(交流プログラム)の一つとして行なわれ、童謡や仏教讃歌を皆さんと共に歌いながら、法話をされたのです。配付された資料(大スクリーンにも映写)は、楽譜



ではなく、歌詞カードだけでした。ただ普通の歌詞カードではなく、大きく長くのばすことばは、大きく書かれ、小さく歌うことばは小さく書か

れています。ゆっくり歌う所は「遅く」などと書かれています。また、1番は「私の願いを心で聞きながら」とか、2番は「仏のお心に感謝しながら」などの注意書きがあります。皆さんが歌っておられる時に、ご本典の「後序」を朗読し、お念仏を称えられるなど、様々な工夫がなされていました。奥様であるキャリーきみえさんの情感あふれるピアノ伴奏と歌の指導と相俟って、本当に心に残るものでした。

■ご住職さんぜひ試みて

上手下手は関係なく、心を込めて仏教讃歌を歌っていただき、そこで使われている歌詞を読みといて優しい言葉で語りかける。ここに新しい寺院活動の可能性が見えてきます。合唱団を組織するのは大変かもしれませんが、くみみなで仏教讃歌を歌う会なら、歌唱指導をする方の協力ですぐできます。「私は音楽は苦手だから…」などとおっしゃらずに。



交流のひろば

皆さんの活動をご紹介するページです。
投稿をお待ちしております。

第13回世界仏教婦人会大会報告 2006(平成18)年9月 常任研究員 前田 正樹

■音楽に始まり、音楽に満ちあふれた大会



約4,000人収容の大会場で行なわれた開会式。電子ピアノの生演奏による仏教讃歌が流れる中、開会を待ちます。ハワイの伝統的な民

俗歌謡による入堂、パシフィック・ブディスト・アカデミーの高校生による《三帰依》などによるお勤めの開始、随所に歌われる讃仏歌。閉会式でも、森琢磨さん作曲の《念仏》が、ハワイ開教区各島から集まった合唱隊によって、英語で大合唱されるなど、咲き乱れるハワイの花のように、終始仏教音楽が使われ、仏教音楽なくしてはあり得ない大会となりました。

■体験型イベントの重要性

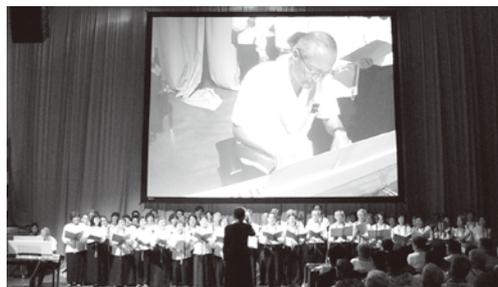
また、体験型交流プログラムである「ワークショップ」では、9種類のうち6種類までが踊りや音楽に関する内容でした。フラダンス、ハワイ民謡、子どもの歌などを通して「アロハの精神(思いやり・



調和・寛大・謙虚・忍耐)と仏教の教えとの繋がり、仏教徒として生きる喜びと感謝を共感する、暖かく活気に満ちた楽しいものでした。難しい内容ばかりではなく、体を動かし、共に歌い、その中で生かされてある喜びと感謝を感動をもって分かちあうことが、どれ程重要なかを、知らせてくれるものでした。人と人とのつながりの中で、心身ともに共感する「み教え」、これこそが浄土真宗の「儀礼」や「行事」の根本なのではないでしょうか。

■次回は2011(平成23)年、日本で開催

さあ、次回は、親鸞聖人750回大遠忌法要の年に、日本での開催です。世界の仏教徒をお迎えするのはどのような「音楽」や「お勤め」になるのでしょうか。どのような体験を通して、人と人との交流が行なわれるのでしょうか。全国の音楽仲間とともに、私たち研究所も積極的に関わってまいりたいと考えています。



コーラスふじの花

委託研究員 丸山 千晶

「コーラスふじの花」は、平成5年に、宗門校である京都女子学園京都幼稚園母の会コーラス部員OGが中心となり、結成されました。

故・竹上廣子先生(京都女子大学名誉教授)を指揮者にお迎えし、仏教讃歌を心のよりどころにしつつ、様々な合唱曲にとり組んで参りました。グループの名前は、「ふじの花」の名誉顧問でいらっしゃる大谷範子お裏方さまが結成時に命名していただきました。平成15年に竹上先生が急逝なされた後も、富岡健先生の御指導の下、京都教区教務所をお借りして、週に一度の練習に励んでいます。結成時より、2年に1度、京都コンサートホールに於いて演奏会を開いておりますが、その際には、プログラムに必ず仏教讃歌を組み込み、歌わせて頂いています。これまでに、《生きる》《いのち》《ゆるされし》《千万の》《み光の》《春の仏》などの小品をはじめ組曲《月と良寛》《観音》など多数の仏教讃歌を多くのお客様に聴いて頂いて参りました。

平成14年には「仏教の心を音楽を通して広く語りかけたい」という竹上先生の願いから、作曲家鈴木憲夫氏に新曲

を委嘱、女声合唱組曲《二度とない人生だから》(坂村真民詞 カワイ出版)が完成し、結成10周年記念第4回ふじの花コンサートで初演致しました。昨年7月には、中田喜直作曲・山崎澗朗作詞《心の季節》、鈴木憲夫作曲・金子みすず詩《みずこの道》他のプログラムで第6回コンサートを開くなど地道に活動を続けております(写真)。今後も、一人でも多くの方々にも仏教讃歌の存在、すばらしさを知って頂く事を願いながら練習に励んで参りたいです。





仏教讃歌と一緒に歌う喜び —
それは何物にもかえがたく素晴らしいものです。

この喜びに出会うため、これまでに多くの方がたが尽力され、
近年の盛り上がりとして結実しつつあります。
その秘訣は何か、そして大遠忌に向けてめざすところは…。

響流する歌声を — 仏教讃歌の大合唱をめざして 常任研究員 福本 康之

■盛り上がる教区単位の音楽活動

この1～2年、本願寺仏教音楽・儀礼研究所に寄せられる情報のなかに、教区単位での仏教音楽活動に関するものが増えてきました。

研究所にはこれまでも継続的な活動として、北豊教区の「仏教讃歌を歌う集い」や安芸教区の「仏教讃歌を歌う会」、山口教区の「仏教讃歌のつどい」などをご報告いただいています。これらに加えて一昨年には、岐阜教区の仏教讃歌交流会と、東海教区の東海仏教音楽の集いが、そして昨年は兵庫教区でコーラス・フェスティバル(2006年2月)が、それぞれはじめて開催されました。

さらに、福井教区寺族婦人会合唱団「無憂華」の30周年記念演奏会(2005年6月)や、滋賀教区寺族婦人会コーラス「響流」がこの秋(9月)に予定されている20周年記念演奏会では、教区内の各合唱団の参加を仰ぐといった形で、合唱団同士の連携がとられています。

■結集への秘訣 — 経験者に聞く

確かに、こうした合唱団の連携は、合同演奏会の開催のように、合唱団活動の可能性を広げたり、情報交換の場を提供するなど、様々なメリットを生み出します。しかし関係者に取材を重ねると、合唱団同士の連携が生まれた背景には、そうしたメリットを考えてのことよりも、さらに重要な、そして決して欠くことのできないものがあることに気づかされます。

まず「一緒に歌いたい」と思う自分たちがいて、その思いが合同演奏会という形で実現されたのです。



山口仏教音楽連盟 演奏会の案内

山口仏教音楽連盟の
あさひげゆき
旭重行前会長は、連盟の
始まりをこのように回顧
されます。さらにこの言
葉を受けて、後藤泰純現
会長は

そうして始まった合
同演奏会が契機とな
って、その輪が広
がり、連盟体へと発

展したのであって、思いの無いところに組織をつくって
も続かなかったでしょう。連盟というのは、あくまで一緒
に歌いたいという仲間の輪が広がった「結果」に過ぎな
いのです。

と語っていただきました。

また、安芸仏教音楽連盟の龍山永明会長は、「最初の一步
を踏み出すことは、もちろん大変です。さらに続けることも
また、容易なことではありません」と話されます。では、その
秘訣とはいったい何だったのでしょうか——龍山会長は次
のように答えていただきました。

仏教讃歌には、色々なスタイルがあると思います。プロの
演奏を聴いたり、コンクールで競うことも、仏教讃歌という
文化を育てる方法の一つではあるでしょう。しかし、皆が
一堂に会し、お互いが歌い聴きあい、そしてみんなで大
合唱する — この「歌う」欲びなくして、連盟の今日は
もちろん、仏教讃歌の盛り上がり自体なかったと思います。
また合同演奏会(仏教讃歌を歌う会)については、広島
音楽高校のオーケストラに伴奏をしてもらったり、会場に
音楽ホールを借りるなどの工夫が、出演くださる皆さん
に喜ばれており、参加者の増加につながっているようです。

さらに、安芸教区「仏
教讃歌を歌う会」の発起
人の一人であった廣濟
兼壽安芸仏教音楽連盟
前会長は、当時を振り返
って次のように話されま
した。

会場や演奏のレヴェ
ル、衣装、パンフレッ
トの装丁…いろい
ろな点で、立派な演
奏会にしたい、とい

う思いはありました。でも、それらに拘っていたら、なかな
か進まなかったと思います。もちろん後悔が無いといえ
ば嘘になりますが、今となっては「一緒に歌うことが目的



安芸仏教音楽連盟 演奏会パンフレット

なんですから、とにかく自分たちに出来る範囲でいからやってみましょう」というスタンスではじめてのが良かったのかな、と満足しています。

現在、安芸・山口両教区での催しは、それぞれが仏教音楽連盟という組織の主催となって盛り上がりを見せています。そして既に述べましたように、各連盟の関係者は、口を揃えて「形式よりも思いの大切さ」を語られるのです。現場で尽力されてきた皆さんだけに、説得力のある言葉です。

■つながりを全国規模に

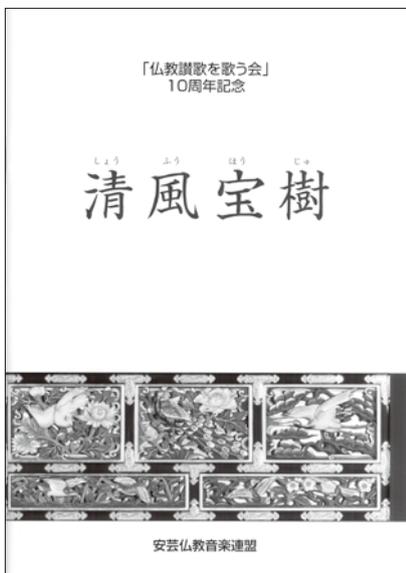
親鸞聖人750回大遠忌を数年後に控えた今、このような教区での盛り上がりと同時に、仏教音楽に関する全国規模の組織を望む声もまた、各地から研究所へと寄せられています。

本願寺仏教音楽・儀礼研究所の活動は、その前身である仏教音楽研究委員会が1962(昭和37)年に発足してから今年ですでに45年目を迎えており、実はその間にも、同様の構想が無かったわけではありません。しかし、残念ながら実現に至っていないのが現状です。

全国規模の組織が構想された当時の資料を繙くと、その構想が結実を見なかった要因のひとつとして、研究所と各合唱団を直接結ぼうとせざるを得なかった、言い換えれば、各合唱団同士の「横のつながり」を持たせられなかったことが指摘されます。とはいえ、仏教讃歌に関する教区単位での活動があまり盛んでなかった当時の状況からすれば、むしろそれを望むのは酷な話でもあったでしょう。しかし現在では、前述のように、教区を単位として合唱団同士の連携が進んでおり、状況も変わりつつあります。

そうした現況に鑑み、本願寺仏教音楽・儀礼研究所では、昨秋の研究委員会において、改めて全国規模での連携を模索するという合意がなされました。

そうした現況に鑑み、本願寺仏教音楽・儀礼研究所では、昨秋の研究委員会において、改めて全国規模での連携を模索するという合意がなされました。



安芸仏教音楽連盟
10周年を記念して出版された楽譜集

■ネットワーク創設と3つの目的

全国規模での連携では、「何のために」という目的を明確にすることが必要でしょう。その点については、前述の研究委員会において、次の3つの事項が、主要目的として了解されました。



- ・ 仏教音楽にかかるネットワークの構築
- ・ 仏教音楽にかかる人材バンクの創設
- ・ 全国規模の仏教讃歌大合唱のイベント開催

まず一つめは、「情報」を中心としたネットワークの構築です。現在研究所には、様々な問合せや情報をお寄せいただいています。にもかかわらずその情報は、今のところわずかにその一部を、このニューズレターを通して紹介することしかできません。ネットワークのシステム自体は、現在の多様化した情報インフラストラクチャーの活用を念頭に模索中です。そしてお問合せが多い楽譜や音源についての情報はもちろんのこと、各団体の演奏情報や西洋音楽を用いた法要の勤修方法、合唱団運営のノウハウなど、様々な情報の相互交換を目指しています。

二つ目の人材バンクは、仏教音楽関係の指導者・演奏家を対象としたものです。これは、一般の寺院において合唱団活動や音楽法要を行おうとする際に問題となる、指導者や演奏者を確保し、紹介できるシステムを念頭においています。

そして三つめは言うまでもなく、教区単位での連携をさらに全国規模に拡大したもので、例えば大遠忌に際してなど、世界仏教婦人会大会のような数年ごとのイベントとして、仏教音楽に取りくむ門信徒の皆さんのエネルギー結集を目指すものです。とはいえ、教区単位での活動にて明らかのように、この種のイベントは、単に人数を集めれば成功するとは限りません。そこには、「仏教讃歌を歌いたい!」という気持ちとともに参加いただけることが必要なのです。そのためにも、何をにおいても仏教音楽の裾野を広げることが求められるのであり、先にあげた二つの目的も決して欠くことの出来ないと考えています。

* * *

盛り上がる教区単位の仏教音楽活動のエネルギーを、来る平成23年の大遠忌までには、宗門の文化として結集したいものです。そのためにも、是非皆さんのお力添えをよろしくお願いいたします。

連載：資料が語るあの時あの場所 第3回

九條武子さまと仏教讃歌

研究助手 馬淵 紀久子

日本仏教童謡協会発行の雑誌『新仏教音楽』第二号（昭和8年刊）に、興味深い作品が掲載されています。作品のタイトルは《静夜》。九條武子さまが作詞し、弘田龍太郎が作曲した仏教讃歌です。九條武子さまといえば、大正時代に活躍した歌人としてとくに知られていますが、実は、仏教洋楽の分野でも尽力された方でした。とりわけ、大正末期に設立されたルンビニー合唱団と、その指揮者であった弘田龍太郎とは関わりが深く、九條の詞に弘田が作曲し、合唱団が演奏するという形でいくつもの仏教讃歌が生まれています。例えば、当時の公演プログラムを見ると、第一回試演会（大正15年3月開催）では合唱曲《無憂樹の花》が、第三回試演会（昭和2年3月開催）では、独唱曲《合掌》と前述の《静夜》が初演されていますし、同年4月8日に当合唱団主催で行われた「佛降誕会花祭りの夕べ」では、独唱曲《生誕の歌》がお披露目されています。ただ、残念なことに、《静夜》以外の作品は楽譜の所在が不明なため、今となっては、これらの曲がどのような音楽だったのかを知ることはでき

ません。優れた人材が集まった稀有な時代だけに、今後の調査が待たれるところです。



九條武子さま

連載：仏教洋楽人物プロフィール 第3回

音楽兄弟——小松耕輔・平五郎・清

研究助手 山口 篤子

小松耕輔・平五郎・清——明治後期から昭和にかけて活躍した音楽家の兄弟です。長兄・耕輔（1884-1966）は16歳のとき、生まれ故郷の秋田から単身上京し、東京音楽学校（現・東京藝術大学音楽学部）に入学。卒

業後は学習院などで教鞭をとりつつ、作曲家として活躍し、後には音楽界の重鎮になりました。平五郎（1897-1953）と清（1899-1975）が音楽の道を志したのも、耕輔の影響のようです。ふたりは10代半ばから、東京の耕輔のもとで暮らしていたので、彼の仕事ぶりを見るうちに音楽への関心を深めていったのではないのでしょうか。

実はこの兄弟によって、50曲近くもの仏教讃歌が遺されています。中でもっとも有名なのは、清が作曲した《四弘誓願》でしょう。この作品で、仏典による歌詞と西洋音楽を見事に融合したように、彼は西洋音楽の手法に日本的な素材を盛り込むことを得意としていました。他にも《盆おどり歌》《児守歌》などの仏教讃歌を書いています。また平五郎も、同じような書法で《少女盆踊歌》を作曲しています。

これら以外にも、小松兄弟の作品には今日まで愛唱されているものが少なくなく、仏教讃歌の大切なレパートリーとなっています。

懐しのメロディー
音楽家の回想 小松耕輔



小松耕輔の著作

連載：歌ってみませんか 第3回

《赤き花赤しと見つつ》

(作詞・岡本かの子 作曲・山田耕筈)

研究助手 今小路 聡子

この楽曲は、昭和27(1952)年に本願寺仏教讃歌刊行普及会が出版した『BUKKYO SANKA』にて発表されました。

作詞者の岡本かの子(1889~1939)は、大正・昭和戦前期に活躍した小説家・歌人・仏教研究家であり、画家・岡本太郎の母としても知られています。10代後半から歌人としての活動を始め、21歳で漫画家の岡本一平と結婚しますが、夫婦間の問題や子どもたちの死去などの苦難を抱え、宗教に救いを求めます。プロテスタントの牧師を訪ねますがキ

リスト教には救われず、親鸞聖人の『歎異抄』に出会ったことから、仏教を熱心に研究するようになりました。

作曲者の山田耕筈(1886~1965)は《待ちぼうけ》や《赤とんぼ》で有名な作曲家です。オペラや交響曲の他に大学や高校の校歌も作曲しており、仏教讃歌には《芬陀利華》や本誌第二号で紹介した《散華》などがあります。

足ることを知る——物や情報が溢れる現代人の生活の対極にある生き方かもしれません。私たちはつい、赤い花を見れば白い花が欲しくなり、白い花を見れば赤い花を求めてしまうのです。豊かで快適な生活を追及するあまり、与えられたものを素直に感謝して受け入れることを忘れがちな私たち——自らを省みながら是非この曲を歌いたいものです。

《赤き花赤しと見つつ》

詞：岡本かの子
曲：山田 耕筈

あ か き は な あ か し と み つ つ
す こ や け き わ が み を さ ら に

— し ろ き は な し ろ し と み つ つ
— き よ ら け き も の と し お も う

— き よ う を た ら え り — き よ
— あ さ つ ゆ の み ち — あ

う — を た ら え り —
さ — つ ゆ の み ち —

JASRAC 出0617150-601

一
赤き花赤しと見つつ
白き花白しと見つつ
今日を足らえり

二
健やけきわが身をさらに
清らけきものとしおもう
朝露の道

情報コーナー

みる・きく・よむ

BOOK

『「歌」の精神史』

山折 哲雄 著

いま、叙情が危ない——裏表紙に書かれた「著者から読者へ」というメッセージは、このような一文にはじまります。

本書のなかで著者は、一貫して「伝統的詩歌と歌謡に底流する生命の昂揚感と無常観」なる叙情の喪失を危惧を称えています。そして、その背景にある「平板な散文世界に埋没してしまっている」現代に対し、万葉の時代以来続いてきた「歌」の精神を取り戻すことによって、もう一度叙情豊かな世界を復興させよう、と呼びかけています。著者の言葉を借りるならば、現代社会においては宗教もまた、「平板な散文世界に埋没してしまった」といわざるを得ません。

「親鸞の「和讃」」そして「親鸞和讃と今様歌謡」と題された第十・十一章では、それぞれ『教行証文類』から「和讃」へと展開していった親鸞聖人の心情変化、そして「今様」という流行歌謡の形式を和讃撰述にあたって選んだ親鸞聖人の和讃に込めた思い、が読み解かれています。内容的な重複の多い『教行証文類』と「和讃」は、親鸞聖人にとってどのような異なる意味を持つのでしょうか。まさにその答えのひとつが書かれています。

■BOOKデータ

山折哲雄『「歌」の精神史』(中公叢書)

中央公論社 2006年8月初版発行

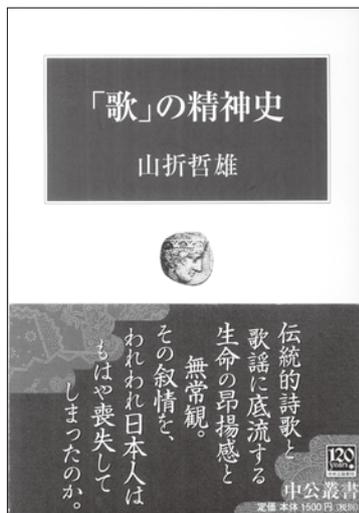
ISBN4-12-003760-6

定価=1,500円+税

■著者略歴

山折哲雄(やまおり・てつお)
1931年生まれ。東北大学文学部卒業、同大学院文学研究科博士課程単位取得退学。国立歴史民俗博物館教授、京都造形芸術大学大学院長、国際日本文化研究センター所長などを歴任。専攻は宗教学・思想史。

(同著者紹介欄より)



CD

『香り立つ歌声

仏教讃歌混声合唱団 コール・スガンディ』

コール・スガンディ

皆さん、ア・カペラの仏教讃歌を聴いたことがありますか？ 仏教讃歌のア・カペラ演奏を続ける数少ない合唱団のひとつに、広島県仏教讃歌混声合唱団コール・スガンディがあります。このコール・スガンディの皆さんが、先日ア・カペラによる仏教讃歌のCDを発売されました。「スガンディ(サンクリット語で“よい香りの”という意)」と名づけられたこちらの合唱団は、アマチュアながらも完成度の高い演奏活動を積み重ね、まもなく結成10周年を迎えられるとのこと。「ア・カペラ」とはイタリア語で、無伴奏による声楽曲の演奏スタイルを意味します。声だけによって紡ぎ出される澄んだ響きには、誰しものが心地よい清々しさを覚えることでしょう。収録されている楽曲の中でも、特に音楽礼拝に関する楽曲においては、歌詞の語感や和声の柔らかな移ろいがア・カペラ演奏によって存分に引き出されています。

一般に、ア・カペラ演奏では互いの声を聞きあい、その息づかいをそろえるなど、細やかな心くばりが必要であるとされます。シンプルな演奏形態であるからこそ、楽曲の持つ本来の魅力を私たちに再発見させてくれるのもであるとも言えるでしょう。

皆さんもぜひ一度、香り立つような仏教讃歌の歌声を味わってみたいとはいかががでしょうか。

■CDデータ

コール・スガンディ

『香り立つ歌声 仏教讃歌混声合唱団 コール・スガンディ』

(SUGA001)

定価=2,000円(税込)

Namo Amida Butsu/わざわいの/聖夜/夕べの歌/芬陀利華/ゆるされし/みほとけに抱かれて/生きる/献灯偈~献華偈~献香偈/敬礼文~三皈依/正信讃/念仏/恩徳讃/みほとけに抱かれて unison version



*お求めに関しては
下記ページをご覧ください
<http://www.urban.ne.jp/home/gizyo/>



2006年度 (平成18) 本刹・本廟での 演奏ごよみ

当研究所では、2006年度、本山本願寺・大谷本廟にご参拝の皆さまに、「仏教讃歌」を少しでも多く聴いていただこうと、その機会づくりを行なってきました。次年度も、様々な方々にも出演をお願いしながら、

恒例法要の折には必ず、より充実した内容で行なってまいりたいと考えています。寺院・組・教区などの合唱団・演奏グループで、本山参拝とともに「仏教讃歌のご奉仕」をいただける方は、どうかご相談ください。

2006(平成18)年実績

●春季彼岸会(3月)

18日(土) 総会所(初夜布教前) **トゥループ蓮華**(京都)
19日(日) 大谷本廟(朝・昼2回) **トゥループ蓮華**
三浦明利(研究生)
20日(月) 総会所(初夜布教前) **コーラスふじの花**(京都)
22日(水) // **本願寺合唱団**(京都)

●春の法要(4月)

13日(木) 総会所(初夜布教前) **三浦明利**
14日(金) // (速夜布教前) **トゥループ蓮華**
15日(土) 聞法会館1階ロビー **龍谷混声合唱団**(京都)

●宗祖降誕会(5月)

20日(土) 総会所(初夜布教前) **藤の実コーラス**(京都)

●光慧院釈浄恵7回忌法要(6月)

21日(水) 聞法会館1階ロビー **本願寺合唱団**
22日(木) //
今小路聡子(研究助手)・澁谷暢達(研究生)
西あかね・藤林由里(ゲスト)

●秋季彼岸会(9月)

23日(土) 大谷本廟(2回公演) **トゥループ蓮華**
馬淵紀久子(研究助手)・三浦明利・澁谷暢達
23日(土) 総会所(常例布教前) **平安藤の会**(京都)

2007(平成19)年

●御正忌報恩講(1月)

9日(火) 総会所(常例布教前) **阪神東組香華コーラス**(兵庫)
10日(水) // **コール・サーラ**(京都)
11日(木) // **本願寺合唱団**
12日(金) // **阪神西組合唱団有志**(兵庫)
13日(土) // **京都男声合唱団**(京都)
14日(日) // **滋賀教区寺族婦人コーラス響流**(滋賀)

●御正忌報恩講奉讃演奏会

15日(月) 聞法会館多目的ホール **本願寺合唱団** 他

★予告★春季彼岸会(3月)

18日(日) 大谷本廟 (午前11時～/午後1時～)

■「仏教音楽ネットワーク」づくりに向けて 演奏団体登録のお願い(再掲載)

当研究所では、教区・組単位での合同演奏会や、「音楽法要」の共同開催、合唱団の相互交流、当研究所が派遣する指導者による練習会の開催などに向けてネットワークづくりを進めようと考えています。

本願寺仏教音楽・儀礼研究所に、演奏団体として約280の団体に登録していただいております。宗門の合唱運動を概観すると、まだまだ登録していただけていない団体も多数あるようです。ご一報いただければ、簡単な用紙を送付いたしますので、是非ご登録ください。登録団体には、様々な情報をお届けいたします。

■本願寺合唱団が新たにスタート!

親鸞聖人750回大遠忌法要に向けて、「本願寺合唱団」のレベルアップに取り組んでいます。指揮者として日本の合唱界でも高い評価を受けていらっしゃる鈴木捺香子先生をお迎えしました。「龍谷混声合唱団」のOB・OGの方、合唱経験者、歌手としてご活躍の方、また現在様々な合唱活動を行なっておられる方にも、「本願寺合唱団」のメンバーとしてご参加をお願いします。

◎音楽監督・指揮 鈴木捺香子
(関西合唱連盟理事・京都府合唱連盟副理事長)

◎練習日 毎月第1・3月曜日 午後7時～9時

◎練習会場 本願寺仏教音楽・儀礼研究所 視聴覚室
京都市下京区西中筋通花屋町下ル 本願寺第三庁舎
浄土真宗本願寺派 教学伝道研究センター内

◎お問い合わせ・申し込み先
本願寺仏教音楽・儀礼研究所
☎075-371-9244

■聞法会館仏教音楽サークル活動 「一緒に歌おう仏教讃歌」

仏教讃歌の素晴らしさを、より多くの方々にも知っていただき、共に楽しく歌っていただくサークル活動を始めています。この催しは、聞法会館の総会所をお借りして、宗門関係者以外の方にも、そして、全く初めての方にも、自由に参加していただけるものです。山田耕筰・清水脩・中田喜直など日本を代表する作曲家の手による「こころに響く」素晴らしい「仏教讃歌」をいっしょに楽しもう。

◎指導 本願寺仏教音楽・儀礼研究所 研究スタッフ

◎活動日 毎月 第3水曜日 午前11時～12時

◎会場 西本願寺 聞法会館 1階 総会所

◎参加費 無料

◎楽譜 当日配付

◎お問い合わせ・申し込み先
本願寺仏教音楽・儀礼研究所(事務)
☎075-371-9244



訂正とお詫び

第3号において以下の通り誤りがありました。訂正してお詫び申し上げます。

P.7下段：タイトル

誤：門司みのり合唱団

→ 正：北豊教区仏教讃歌を歌う集い

連載 本願寺 折々の文化 第4回

— 本願寺の花の文化によせて —



かごたに まちこ
籠谷 眞智子

京都女子大学名誉教授
本願寺仏教音楽・儀礼研究所 客員研究員

本願寺の御本堂へお参りして、まず印象深く思うのは、御本堂中央の御本尊前の一対の立花である。

春夏秋冬、それぞれの季節の花が立てられ、合掌のこころをなごませる。御本尊様のあたたかさを感じさせ、立ち去りがたく思わせる。

2006年の10月下旬、久しぶりに御本堂へお参りした。御堂中央御本尊前では、いつものように一対の立花が、参拝者にやさしくほほえんでいる。

この日の立花は、白菊、黄菊、そして優しいピンクの菊があざやかなみどりの葉を背景に、やさしく活けられていた。

親鸞聖人が著された『浄土和讃』のなかに次のような二首がある。

いちいち
——のはなのなかよりは
三十六百千億の
光明てらしてほがらかに
いたらぬところさらになし



側に燭台が配置してある。

たのみぞよ老木の花はちるとも
さきつづくべき万代の春

これは覚如上人が、桜花を詠んだ一首であるが、上人の一代を描いた『慕帰絵詞』には、彼が大花瓶に活けられた桜花を、手をかざして眺める姿が描かれている。

* 御正忌報恩講 本願寺総御堂の立花

——のはなのなかよりは
三十六百千億の
仏身もひかりもひとしくて
相好金山のごとくなり

浄土とは、仏のさとりによって創造された国土、即ち安楽浄土をさすが、その浄土に無数無量の花々が、そのいのちを咲かせるという。

いつも御本尊の立花に、合掌のやさしさを気づかせていただくことを仕合せに思う。

また本願寺には第三代覚如上人の生涯を絵巻で伝える『慕帰絵』があり、重要文化財に指定されている。この『慕帰絵』に、覚如上人がこよなく好んだ桜花の立花を鑑賞する姿（八巻）がある。桜花は卓の中央の大花瓶に立てられ、右側に香炉、そして左

■編集後記

当研究所主催の演奏会で、出演者とお客さまが仏教讃歌と一緒に歌う姿を目にすると、仏教讃歌の広がりを肌で感じます。出演者と聴衆といった立場に関係なく、ともに歌い、心が揺り動かされ、大きなよろこびをわかちあっている姿には、あらためて仏教音楽のもつ力を認識させられます。

昨今「今、生きている」ことを実感できないという声が、非常に多く聞かれます。こうした時代の中、ニューズレターを通して、このよろこびを多くの方にお伝えできればと考えております。

(事務局)

■掲載記事・情報募集中!

教区・お寺での仏教音楽活動、様々な合唱団活動、学校・幼稚園・保育園での音楽活動、法要・イベント・記念式典など、皆さまからの情報をお待ちしています。

■Webサイトもご覧ください

本願寺仏教音楽・儀礼研究所のWebサイトでは、本紙と連携しながら、さまざまな情報を発信しています。

■バックナンバー、及び本号の追加配付、新規購読希望は下記までお申し付けください。

『佛教音楽 ニューズレター』 第四号 (2巻2号)

編集 本願寺仏教音楽・儀礼研究所
<http://www.2.hongwanji.or.jp/ongaku/>
発行 浄土真宗本願寺派 教学伝道研究センター
所長 上山 大峻
〒600-8349
京都市下京区西中筋通花屋町下ル堺町92番地
本願寺第3庁舎内
TEL. 075 (371) 9244 FAX. 075 (371) 5761
発行日 2007(平成19)年1月31日
頒価 無料